

白氏文集 十七 西涼伎（二）

加藤淳平

長年邊地に戦ひ疲れたる老兵士、邊境の地の將軍の、涼州の獅子舞を餘興とするに堪へず。

西涼伎（二）

西涼の伎（二）

有一征夫年七十

一征夫有り 年は七十

見弄涼州低面泣

涼州を弄するを見て 面を低れて泣く

泣罷斂手白將軍

泣き罷み手を斂めて 將軍に白す

主憂臣辱昔所聞

主の憂ふるを臣辱づとは、昔聞く所なり

自從天寶兵戈起

天寶 兵戈起りしより

犬戎日夜吞西鄙

犬戎 日夜 西鄙を吞す

涼州陷來四十年

涼州陥ちてこのかた 四十年

河隴侵將七千里

河隴侵さるること 將に七千里ならんとす

平時安西萬里疆

平時の安西 萬里の疆

今日邊防在鳳翔

今日の邊防 鳳翔に在り

緣邊空屯十萬卒

緣邊空しく屯す 十萬卒

飽食溫衣閑過日

飽食溫衣 閑かに日を過ぐす

遺民腸斷在涼州

遺民は腸斷ちて 涼州に在り

將卒相看無意收

將卒相見て 收むるに意無し

天子每思常痛惜

天子思ふ毎に 常に痛惜す

將軍欲說合慙羞

將軍説かんと欲せば 合に慙羞すべし

奈何仍看西涼伎

いかに仍看る 西涼の伎

取笑資歡無所愧

笑ひを取り歡びを資けて 愧づる所無し

縱無智力未能收

縱ひ智力無く 未だ能く收めざるも

忍取西涼弄爲戲

西涼を取りて 戲と爲すを弄するに忍びんや

（大意）獅子舞を見て居る中に一人の歴戦の兵士が居た。年は七十になる。涼州が慰みものになるのを見て顔を伏せて泣いた。泣き止んで手を合せ、將軍に申し上げる。『主君の憂ふるを臣辱づ』と昔聞いたことがございます。天寶年間に戦ひが始まって以來、西の外敵は毎日のやうに國境地帯を侵犯して居ります。涼州が陥落してから四十年経ち、河隴地方（今の甘肅省南部一帯）の敵に侵略された地は、正に七千里にも及びませう。平和だった時代の安西都護府は萬里の遠い所でしたが、今日の國境防衛司令部は、長安から僅かな距離の鳳翔府にあります。國境地帯には十萬の兵が駐屯して何もして居りません。食糧は十分、温かい衣服を身に纏って閑かに日を過して居ります。敵の占領下の唐の民は、はらわたを斷つやうな思ひで今も涼州に暮らして居りますが、唐の將も兵も顔を見合はせるばかりで、失地を奪回する意欲はございません。天子様はそのことをお考へになることにいつも口惜しく思つて

居られます。將軍が何かをおつしやつても恥づるばかりであります。それなのになぜ今もなほ、西涼の獅子舞をご覧になるのでせうか。人を笑はせたり喜ばせたりするだけで、國恥を感ずるところはございません。たとへ智力が無く失地奪回戦はできないとしても、西涼を遊びの對象とすることにごうして我慢できませうか」

(平成二十九年三月十五日受附)